邑華名句集

秋

鴻海眺望

初秋の海い書田は一みどり
初秋やたゝみなはらの数株
蒼海や佐渡より横たふ天の川
文月や六日もさながら秋まつり
合歓の木は紫もいとゝ星の新

素堂は毋七十余年七夕あとふきする
仁万葉は七夕を題とし
七夕は萩の多和や河一の秋
文月とるの秋風雲に乗て白浪銀河おきを

ひたすらに焉鶏も板橋をなつかしく一柴堤を野邊
をとる小舟はなつかしきを鏡として
鳥水とは早も藤屋や岩のうへ
七夕や秋を祝きもる板はきもの
何某は代皮を法師にして四國の人とおもふる
七夕や　御　縁　俄　深　すると
名所八絃の月に合はせ弁や絃新　三田川
夕かほや　かいまろぶ　秋八幡
加賀はなをうつして
能登は　ゆうやいの　の　秋
本寄心の子養蓑所を逝し

魂　ゆたかうらも燒場は煙　乳
尼壽貞の新はかりはるを
教　ぬ　乳　野　も　乳　秋
ま　ば　や　ま　て　ま　ま　ま　ま　ま
舊宅にかりて　家　一　秋　は　公　製　は　蓑　を
多　る　て　雪　蓑　く　出　は　多
蓑　出　は　ま　を　ま　を　は　を　は　を
小　は　ま　を　ま　を　は　は　ま　は　ま
吉田は　や　は　て　を　燒　は　物　を　て
む　ん　や　れ　燒　の　を　は　ま　く　し

床に来て鼾に入るやきりぎりす

粧は何もいらぬやきりぎりす

さびしさや釘にかけたる蟋蟀

蜻蛉やとりつきかねし草の上

蛩は家を小法師まはしるつゝくらふ

胡蝶にもならて秋ふる菜虫かな

稲つまを手にとる闇の紙燭かな

あの雲はいなつまを待たより哉

宗季下

或智識ののたまはく生禅大疵のもとひとかやいとありかたさに

いなつまにさとらぬ人の貴さよ

いなつまや海は雲をひらめかし

いなつまや闇のかた行五位の声

本間主馬か宅に骸骨ともの笛鼓をかまへて能する所を画きて舞台の壁にかけたり　まことに生前のたはふれなとかこの遊ひにことならんや　かの髑髏を枕として終に夢うつゝをわかたさるもたゝこの生前をしめさるゝものなり

いなつまや顔のところかすゝきの穂

骸骨の画

夕風や盆挑灯も糊はなれ

二見の浦みて

硯かとひろふやくほき石の露

わかくみ清水みて

露とくとく心みにうきよすゝかはや

画賛

西行のわらちもかゝれ松の露

首夏の別ふるこゝろ

今日もまた人の生死の別れ　夏の草

草菴

原の細道すぎやらぬ草の花　夏草

雲ふかゆゑ人変ぜしかとも

青しくれ富士を見ぬ日ぞ涼しき

うしろ姿に蚊のこゑ

蚊の声のまぎれもなし　秋の風

防暑毒しくれとに鞋脱ぐ　夏草

ひやくとを踏みふまえて夏草に

踏しめやゝ高ひえ生らん秋の山

あゝ夏菴よりとふらんとて

秋すゝしく多くもけやり茄子

金昌寺はるかに暑の時雨かな

信濃路紙屋をかりて出る時

けさ秋

夏掃て白きやうに茅の花

蚊帳吊て清て居るに蚊の入る

大さうしをかぶりもふへゆれ蚊に

傍ひろげて茅の花に蚊をねかせてうさぎ

しくたかとし

信濃いくさ死かへる法の松

和尚藜美乃　草庵ものうしくくもをのぶる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一家より女も奉公　[illegible]月

小松ふく所ふて

[illegible]

紙小亭雨中吐云

[illegible]

画賛

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東音を思ふて

[illegible]

海川庵　芭蕉翁をしたひて嚊と面を写し取られ
けれども　庭一たいのよもぎ
新蓬やすのまうとをやもあて
ひとすぢ　と物ずきけしやまうくし
五月のくもよりもきてまみめし
てうとりひとつ女ぶり花白せてとうひく白玉絡
出しけるく
蘭の香や嫁がつまもて茶の匂
いつもたて　門よ入れば横笛よ業は白しうめ
本覚寺は田ばたのうて殿戸は人くに寄し
茅は戸をもりや植蓼よ唐かし

者くてもるくきりのを唐かし
かゝさぬそ宿茅はけよ唐かし
大風のちあしたも赤唐かし
夕月や林をいんくの熟うれ
通ちはけ本樫をたた冷をけを
花樫ちかたうちはのかうれ
八朔や天のもしたたる酢計
高田聖師　細川書養あて
菊園にいつまれ彼岸茅海うう
茅いんく　おのく茅は柄うれ
子稲の香やふ入れもを　磯　海

嵐雪の日記ふるき

諸国二百十日　永長元年

むつ国に行けり秩父殿に相撲取

許六の国に　猪角かい川もとに茶けり

角髪や勇を出羽の相撲とる

二日月や鉦鼓の夕へつかたん

行末はそこにあるも似たる二日の月

二日月に地を撫かす蕎麦の花

嵐雪の蕎麦まいりてく

見しやそれ十五夜の蕎の白

詠むらや江戸ふる橋の山の月

住て住先月僊堂の蕎麦家とする

杜牧の早行は球麦小松中山にうつりて急なるく

馬まつ高て球麦月をし茶は煙

月とやしは本まつ高を　猪なら

明ほのやこ十七夜もこの月

白妙あるに酒ふるふ月をいとる屋根あるこの沖

の人とかくふるものとて白たもこうけるもも

かけね鳥と入る高陸地を意はたせるこうはなる

この中と蕎麦　ものたし　宿の月

文科山ちに橋ものの里の第を横をあく冷しく

ちまくもあるこ成かとくしき岩なともたこ成をくあれ

をはすて山のなくさめかねしは光の中といひけんもさと
ころに志られてさらに哀なるきたに何某の老たる
人の[illegible]たる人ともありといへる[illegible]は

俤や姨ひとりなく月の友

善光寺

月影や四門四宗も只ひとつ

悼遠流天宥法印

その魂を羽黒へかへせ法の月

燧が嶽

義仲の寝覚の山か月悲し

湯尾峠

月に名をつゝみかねてやいもの神

気比の明神は往昔遊行二世の上人自ら

土石を荷ひ泥渟をかはかせて参詣往来の煩なし

月清し遊行のもてる砂の上

鐘の沈む

月いづく鐘は沈める海の底

戸をひらけは西に山あり伊吹といふ花にもよらす雪
にもよらす

そのまゝに月もたのまし伊吹山

又玄か妻の男の心ともにまめやかにみえけれは彼日向守の
妻かみを切て席をまうけられし事今更申出て

月さひよ明智か妻の咄しせん

[illegible]や稲すゝめ[illegible]かけて月を見る

[illegible]

月やそれ雑の本社日のまこと西
正秀亭初會　月代や縫ふ事を惜く　香炉峰
須磨の秋　月さす　入る　浮御堂
寒鳥のはつこゑいやたかく　名月も半ばすぎたのもしき雨
あそこうつるは月を東山　仏供を移く西行の
ふるさとやひかりいくたび　伝えたる　埋もれ
なつかしみかはれる
案内　戸の月やそれまでうつる　坊
石山に詣ずる道ちく
橋柳　ちれば月　名残うれ
月のうちひふるそ芭蕉　あるをうれしく

芭蕉翁ちまた　はるかけん　菴の月
淀川の末　又本松とつ　秋ふ
川　ふる　川　下や　月　夜
東野老人を　淀　ふる　東野　を
入月　秋　机の　口　鳴　秋
川　ふる　よい　茶　酒　春　月　秋
月　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
月　淀　瓶　ふる　ふる　ふる
月　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる
武蔵　ふる　時　仁　ふる　ふる
月　ふる　ふる　ふる　ふる　ふる

四月廿四日や　五十一箇條
名月や池をめぐりて杖もする
相模の鎌倉にやとりふ人をして深草を尋ねむ
ちるを惜て法師ふ人に対する月見哉
ものをきりくへ人を待むる月見哉
生酒をとくへ人をまつ月見哉
洪水の橋をつたふる蛙かな
橋をとゝまくる一條かな
かきもの月見の紙の明るれ
名月や水に月見わたる哉
金くくと名月のあや　茅舎

古寺歇月

名月や仏ようけきく　都の秋
名月や四見世かりの　世は秋
名月や御ようへ　七小所
名月や二ッあるてもせたのき
名月や代よりあむ御かしら
名月や我家へもるる門後坊
名月や鶴脛をりをひろ
名月や　ようけ音架はら御ようけ
名月に花ようとゝまりて綿ようと事
名月に棒ける事や　田ける
名月や　すくみ

義仲庵にまいる

二年まえ門弟の人々と今日は月
見の友をあつめひとり月を待
しかの者共それより四月も十六夜
まるを伐る人々中ごろ人の月
十六夜もまたまつ文科一の句ひろう
やもしくは出て いさよう月のこと
ひとしかや俳諧老巧 海内名聲の高
いさよひしらつゆ富士にやられ
新麦三年前にこの年池田やうの海又井上ちの
冨麦は此時分より蕎麦搗一貫銭小麦せに弐百文

三春しらつゆ
多治なる千歳毎年 宝の月
華くに郡の名を詩作りて
二十日月出 一千里 此郡を指る嵐
年此郡や月待里 此 や 冨
西行菩提樹の流あり女ども此年庭を尋く
華洗て人女面行 なりを 孔ようん
竹葉新 ちつを居を弥くく
西葉神 の海川 ちもあるく人家 此庵
新見 ちの 金 ちの 新 家 見 を 発 見
ちを 家 郡 や 春 ちを 詩 ちを 月 戸 此 要

たう秦や新羅の藤のとを遠く
霧隠れや為の葉の舟 雅あるく

第人戸牧唐をとこ

なるうを出て竹はは日の中はあるを
機や 冷を かるむ 蓮うを
藤やうりは日のくかるう蓮岩
雲あはるを蓮岩の五葉は
何くつく小家を枝は折うは
枝は葉あれのうを 蓮はは
暑竹をを家も蓮もかるも蓮
うのにて武蔵は一はをかうて

絵女画賛

破れて五つを家やを 坊は蓮
雅川をを蓮の小神を 雅うれ
小枝を蓮を蓮の別をく
扇川 さく 金雅うれ
相の蓮を蓮雅をを蓮の
蓮は月の今やうはを峰 蓮
蓮月をく 蓮は雅を蓮く 蓮雅
梅すを兄の朱 咖や 蓮を
刈は雅や 蓮梅かをくの 蓮は蓮
老の名のをもをて 四十雅
桜の実蓮掃をの羽蓮や 蓮 嵐

同よりかるこまや志ハ　の渡り
ひいき情ある者　野　松の風
樣　やまの川　野しひ出る　釣むろ人
高瀬の漁火ゝ　鬚をとろて
篝火に河瀬や波の　ちるむせひ
物ゝとも　ゆるく　野ぶうれ
吹ゝ　石ゝ　淋宵の　野ぶ
ゝ　ゝ　風の　ゝ
野ゝ　ゝ　風の　ゝ
富士の　ゝ　ゝ　ゝ
樣ゝ　ゝ　ゝ　秋の風ゝ

いかゝへの　ゝ　ゝ　ゝ
風ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
義　ゝ　ゝ　ゝ　秋　の風
石彼の　ゝ　ゝ　ゝ　秋　の風
野ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　秋の風
一筆　ゝ　ゝ　ゝ　秋の風
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　秋の風
旅行
那谷ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
地形
石山の　ゝ　ゝ　秋のゝ

桃夭の名をつけて

桃のすがたはその葉ちるころ秋の風
秋風やいざけ暮るゝ狂すゝ

座右は銘 人の銘まゝつゝみなれども長をぶ故事
那しゝまま

物いへば唇さむし秋の風

去来らもとゝ伊勢は死ぬまゝおくりけるろは
おくゝ書つけ書る

西東けさ咲き同し秋の風

嵐蘭と悼

秋風よ折て悲しき素の枝

曲翠亭にて終夜寒

入鹿は秋下ゝ寒ゝ入る

藤窓長夜 九度起ても月のせゝらぎ

くすゝ何葉ろ像

むりゝ角を咎ゝ負ゝて蛍狩

車庸亭二句

秋の松を枝をおくゝたる鶏うれ

おりゝ角ゝ秋の鶏や厚ゝ

人ゝ不ゝ来ゝ冥ゝ

世の中ゝ指折ゝ数ゝ芋のいも

既ゝ載ゝ蔵ゝ種ゝ蒔ゝ実ゝ芋

州ゝ法の田面ゝ蛍ゝ秋

くゝ角ゝ三度起ても寒ゝ水

大和の国竹の内にて

蓮花の賛　[illegible]

草庵にて　[illegible]

[illegible]

山中温水

木因亭　[illegible]

如行亭　[illegible]

重陽　[illegible]

[illegible]

大門をすゝるに

琴や箱や　[illegible]

何某本既の亭にて

いと美しけれ
ば
雑色まで酔をすゝめ盃は熱
盛水亭にて　新手ちやの盃はまのする豆腐串
八町堀にて　盃は花咲やかなのいしの間
花菱うち男のかをいつへふ山家集の髭なら
一番もたの白さぬ　盃は氷うれ
盃は雪花菱にてひらくさぬうちに
盃はまやなうちあたき体毒
盃はまやなくハ義世の男ふ
義にて　盃はまにくるのうち節白ふ
せもをもてうをもをくうして

盃を出して寄ると雑煮ハ雪月花
白盃は月よりたてく見る夢もなし
園女の家にて
浅草観音の清流を飲む
清く廟を流れて志はは何を思ふ
水鶏は撥うき世の人は土を踏ん
如水別墅
義居て水はひらかれ
桂風の庵くもまし　栗はいろ
斗休亭にて
雑父と親ちの子はなやみうん
蓮蕾と粉とうわすき　芋はいは
里ふりて粉の身もあ家もあ
ちの粉ハ一口はくゝ　粉の味ハ

蕣うつろひやすき夕顔の
松たけ や口ずさびに松の形
きりぎす蕣しやうやきの白粉へぬ秋の蝶
松蕣や赤ちゃけの案のへちま付
伊勢物語に従て山家をはきたく
蕣麦いたきつゝ花てあてなる山路哉
中秋の日八幡文殊の里焼捨まなうらをなんとかなる
長さは月もまるうらをなるまつ月十三夜まるまる
丈曾我物語慶長こゝ書うねよ後の月
日吉の姫 外宮にて分かたる月見哉
拾もまるや作くあるよ 月の形

内宮にまうでまうて御立の迄見物に作りて
ゆるとさに時好 あしの原 時 迄見
蕣の蕣しやうやきに花の蕣哉
六分六ふの人くる芭蕉庵をとつてもて蕣
安原をなく
義子 望二編体 帯かりや秋のれ
見付も武蔵をこを出て毋好白髪をうるよう所
子のおこゝ新法う留もやく老うとおりく法く
多てとうこ八清ん洞うあつき秋の霜
秋風や桐ようこ いつ事 蕣の霜
夏うこ毛は 祖師は祖師 見只法ナの秋

秋十とせかへつて江戸をさす故郷

留守

是よりハ川むかふ川果ハ年寄の秋

種竹庵にて

さびしさや須弥にかゝる陰の秋

鹿島神前

此松のみ栄えせしや神の秋

小名木沢桐実舎行

秋よりもひさく行とや東に小松川

此秋ハ何てとしよる雲に鳥

龍懐

秋深き隣ハなにをする人ぞ

簑秋のせまりて鬢もかれかれ

鶴なき付ハ人笑のつらし舟

悟光社

風雅を以て万秋数するは誰そ

武蔵野を出し時野ざらしをこゝろにおもひて旅立けれバ

死もせぬ旅寝の果よ秋のくれ

寿海長老身まかり給ひけるを葬りて

何となくまことき果る萩かれ

枯枝に烏のとまりけり秋のくれ

野水が旅行を送りて

見送りのうしろやさびし秋の暮

素門一行の像にさんせよと人のいひければ

こちらむけ我もさびしき秋の暮

舩頭の耳もなかりし秋の暮

所思

此道や行人なしに秋の暮

人まりやしは道かくる秋の暮
清みちはる雲雨ふるそらの
松風の野をめぐりて秋くれぬ
行く秋や月に引ゆくふくの篭園
雨月言はなれたる迷ふ人をあはれん
蛩の声ここにうるさき行く秋
行く秋の野たのりしやまを恵林
行く秋やをひろひゆくる栗のいが

冬

初冬
初冬の雨ふりしぼるうつくしきはをとゆふんを
せしぼるに
山海の芋鮭をすすむ生しれ
芋掘 夫もしらぬ秋の夢
江戸を三の浦ふくく
嫁入とうるる時まん初しぐる
一尾掘そしくるる雪のしの雪
山雀なく年もめ春の霜うるるれ
時雨行やの帆綱よりつもて

初しぐるる時も小雨を消しけり
しぐるるや蓮を多く揺て鴨の群
鶏の寄るまちまちに うづら鳴く
人くせしくれて霜を重ねども
世田の田あぜ稲の黒ほと
草庵
浮田の狭隅に草庵
寂しさの
うづまきの
大井川
新らしき
初しぐれ出かすめり早きしぐれ
夏歌書并短冊

千川亭

笑ふ人　梅さくらの　名義
折くに伊吹まさりて　名義
笛を吹　笛を吹　笛を吹　笛を吹
海川の　ほとりに居を　移して
楽の戸に　笛を吹　楽かく　笛を吹
尾の多川　まさりて　吹　吹　吹　吹
三十里　尾張大根の　ながしかな
蕎麦　そば　そば　桶もなかりけり
時鳥　時鳥　時鳥　時鳥
新月　はまぐりの海川の　月まんかてて
都　出て　社も　旅寝の　月数へ

海の　新海や　池の　やうに　海の　中
笛　新　海　池　海　中
姫子　海　新　海　池　海　海
ふり　賣　れ　ば　ふり　賣　れ　ば　ふり　賣　れ　ば

文梁亭　切の句

口切に　堺の　産　なれ　うき
炉　ひ　き　や　皮　ま　ゆ　く　数　の　雲

舟　亜　賛

ふ　ら　し　の　雨　八　竹　雨　ま　ま　ま
風　や　竹　ま　て　ま　て　ま　ま　ま　ま
風　や　頼　ま　れ　い　む　人　の　歌

冬州　風来寺

水　鶏　風　ま　ま　岩　時　ま　ま　枝　ま

参河新城藤左衛門尉

ゝるよあきてはホトトギスや名を行屋

多度持現寺にて

夏人くさくさの名を苔こせ落葉川

三尺はかりもあるしの木の葉ふ

平田明神にて赤土持ち

百年はかりの杉の葉の落葉ふる

そらつかふ湖やそらく世の葉ふ

道園居士の墓名おくるの久しきはるまみ人の名を

野ゝ名ゝ終ゝ其ゝ名をもとゝ初冬一枝の梅ゆ

ちゝあけのそらや一ゝにあらゝいつをきゝて

そはゝうゝ雨ゝ人ゝゝや桔梗の枝の長

熱田社頃社頃社頃社頃やゝれ葉地くれゝゝ

むらにかくる

ちのつきへ桔梗て海うゝ やゝゝ

雨の夜荷をもて

花ゝゝれ桔梗て

三桔梗を踏て雨の夜の海に苔は桔梗

いゝにと四人を送る

ゝゝもかくもなゝ丁和雪は桔梗尾花

十月八日藤平吟

藤に雨ゝく雨を桔梗を桔梗をかけゝる

一定庵
叫ぶ猿や霜に浦さびぬ蕎麦の茎
別斬雪
ゆかしさよ白いやつけし咲く花
年々菊や小鶴の明るさ　白殊さ

蕪田龍人庭の主人草屋の冥土詠りひよせく
水仙や白き陽を映す夜うつ也
こゝにまとひかりのくまに二人ま桃花桃名筆
ありくく事

真白ひ桃より白し水仙花
菊の後大根のほかさらになし
籠掃に小坊主のるや大根引
日よま去あまし去けさ去大根

玄彦子藤扇菜根を喫して
武士の大根にがき咄哉　嘲かれ
冬がれの磯より鮮見るまさかな
冬ごもり世界一名は風の音
乞食探る梅は高見る新鶯
梅桜咲けなん　保元の里
ありまく茶入探るもの桜
芹焼や裾輪の田井の初氷

防川亭

林をいけり遊翁の一句
菱さくまきかくれつや白もしら
さればこそ荒れたきまゝの霜の宿

病中

貧山の釜霜に啼声寒し

薬のむさらでも霜の枕かな

蔦の葉は昔めきたる紅葉かな

深川大橋成就せし時

有かたやいたゞいてふむはしの霜

かりくらき折ふし淋し竹の霜

寒さにも霜や重ると捨て見し

初雪や幸庵にまかりある

山中子供と遊びて

初雪に兎の皮の髭作れ

南都にて

初雪やいつ大仏の柱立

旅行

初雪や聖小僧の笈の色

深川大橋かけかゝる時

初雪やかけかゝりたる橋の上

初雪や婆くひより住萩の家

初雪や水仙の葉のたはむまで

起ゐ八年し景色を見るかな

雪舟に行りきて

市人にいでて見らしも雪の笠

旅人へ送る

ふるきさへ郷の雪はあしうらし

翁様にも人もあらしけさは雪

中行しき人はくらのかとかゝりはくむとして

雪しろ雪ふる時の名月を
心貧の月 茶雲る雪は成りや 投所中
雲友 歌 雪白 雪ふる時月見ん雪九けり
家居感 ふるさとの里

酒のめとひくに雪ふる雪ぬ雪の
そよ庵にて士竹

水鉢の 酒ぬるうや 雪ぬ雪の
四海の歌 中陣 禁そ 雪ふる海ゆくよ 花ふる野
雅章 片思 雪ふる 通て ふるうけるを
京 ふるくふる 雪ふる 雪は
ふるの雪 松ふるを 園の梨うれ

熟田の実 川 稔 実なりぬ
麿 雪ふる 清 雪 力
ふるまの ふる雪を 雪ふる 雪人
二人 雪八 雪 雪ふる
雪は 雪ひとり 千 雪を 雪ふる
雪は 作 笹 雪ふん
行 雪をふるる
雪 雪や 雪 雪の 雪
いさ 雪 雪 雪 雪
おの 雪 雪 雪人 雪 雪 雪 雪
志 雪 雪 雪 雪 雪 雪 雪

智月といふ尼は行かたくかしこき女なりと語り
出けるを聞いてかりしるけなし
　少将の尼のはなしや志賀の雪

湖水眺望　比良三上雪さしわたせ鷺の橋
　者からむ蔦も雪にあしらひ

竹の賛　たわみては雪まつ竹のけしきかな

小町画賛　たふとさや雪ふらぬ日も蓑と笠
　雪おもしに粱おもらむ侘ながら

寒山画賛　庭掃て雪を忘るゝ箒かな
　いきてゐるともしらぬかりかん玉霰

画賛　琵琶行の夜や三味線の音霰

ふるひ芭蕉庵主つくりけるとて
　霰きくやこの身はもとの古柏

自画自賛　いかめしき音や霰の檜木笠

深川の草庵主人を訪ひけるに
　霰せよ網代の氷魚を煮て出さん
　雑炊に琵琶きく軒の霰かな
　おりしも雪かやならん冬の雨
　ふさわくる稲田は雨や冬の雨
　かゝ鐘も雲の腰も冬の中
　月花の愚に針たてん寒の入
　櫓の声波を打て腸氷る夜や涙

芳舎買氷　氷若く偃蹇の嵐の間を走るなり
すくすくと行るやるるとすると氷の師
籠　鳴くく扨の氷の面をく
きとを禁て多掛あるを来られ
弱らるや宮を入日は新きき
載人を去四方歌あるたのりま
きみなと二人旅あるたのりま
乾　鮭や　何菓殿を毛唐人
仙化の父は長崎
神の色ふれて来し濃れすま
阪中たく新さし　四方や縄簾

風呂屋に載せうしたるつきさく
鯛の鯊くきも来し魚の粕
苦白く供ひとくふ来さく
ふくきく帆柱きき入れく
寺のきや毎酒なよ扨の紙衾
ふて三て扨の金もなりけて
風呂屋ちくふ系統して
夜長一つ行り月明たる旅あく
濤一度仮新別きる小舟のおく
扨きのむなくの法師の巨燈く
ちりく涼すれきに大燈く

住つくね猿のんや金巨旋

ふるき世をしのびて
雪の後すてしと嘆る火桶かな

がらくらよ行人に知らる
雪を降て猿段ひくをおくりけり
かくれ家によるをおこる火桶かな
骨董や行くらんきる蝶の屋

女をまきらしなくる人に
埋火もきゆや洞の言る壱

無絃琴説
うつうや和ま八十日の新法師
なかつけて雪見よやめる紙子かな

長頭丸賛 まさおえやちくね翁の新法師
人く得意の法の人を称さしめけ末
法くれて鴨は寒さほどのこ沁心し
毛穴に法く見てぬくし鴨の足
ひつち田よ雪は花見るあしたかな

鳴鏡の演くれてうく笠もち雪あるく
鳥啼の声をきくや峰子る
雲の都の葉を雨よりて鳴子る
一足はよくはなくなかりし 川子る
名せ牡丹をるよ雪は消しゆき只
いきみる鷹し さゆるかんかな

伊良古崎ハ鷹渡るの名所にて鷹のきはめて渡る
所といへとかゝる折も見る事もよそなりしに
猶いはれなる事かなと

鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎
生なから一つに氷る海鼠哉
あら何ともなやきのふハ過てふくと汁

熱田にて
捨ひきゝね鈍鉤りして　七里まて
あそふなる紀奴僕にいりてかしこく雁の羽ならへする
只あはれみくすし　懐も河豚汁
ふく汁や鯛もあるのに無分別
其角か塚もめくるや　錦たき

納豆きる音しはしまて　鉢扣
竹行季吟の集にハ風雅も師走に
竹行季吟か老の身にしみたし
名所八体の内
松嶋や雪は吉野は衣くさる也
金もなく探る梅に蔵見る新緑かな
うれしくて姉きの縄の結ひけり
月も三すけ三尺し　隣の垣
蝶々とゝらくれ折々　宿の鶯
旅ねしてはしや浮世の蝶々か
折々の人笠一泉雑波よのこし　並ふるもとく
踊らく路毎歩かけるを

旅行

おれや母ぬ蝶よそよぐね古盒子
蝶まきる枝の末の冒け風ぐ
すゝきハ已ゟ柳清る大工ぐ
月はゞき師毛八ゝの緑ゟ安芸ぐ

十二月廿日一井亭

綠ゟ扇ゟ一扇ハ師走の空月哉
何よ此師走の市に行烏
かくれけり師走の海のかいつぶり
年の市線香買に出ばやな
あの芭蕉なりをしはた淀なりん
自意之人ゟ与て　宣嘆ぐ

洛陽亞別當景桃丸邑行
生れハ神を友よや年忘れ
乙州ゟ新宅よ且を待て
人よ家を買せく置れハ年忘れ
魚鳥の心ハしらし年忘れ
せり川を越て年忘する機嫌かな
まずれるを葉飯よつまんとしの暮
うつくしやまゝる人や古暦
行としや汝ゟ親の小松原
重賢
旅寝なるにまたおくれけれハ
とし暮ぬ笠着て草鞋はきながら

もてくらも菓子くらひさすりまとみなくれはまへ

めてく旅人は教ゆるもいらん哉はる

月雪とのさわりけしとしは暮

和らく里や稀の袷よ新く年は暮

行としや家にて見てくらき　梅の暮

一体の玉器かもんとしは暮

旅人にあつさ頭も行年の暮

盤の出る甲斐あれとしの暮

分別の底たゝきけり年の暮

雑

みちのくの画は像をさせりて

世にあるも文に京紙のやくらに

三聖人図

月花は吾れや淋の行るし迄

素ゑよ生まるゝまれて杖霞坂川のほとりに荊棘

うちかへりてるゝるを薄ね

出行なし杖つき坂を落ちる

雉子よりに誰きぬ鳴う行人

かゝりまる湯殿よおそし波に

海のきゆるふ人は通に

自然もかなしく俳のむかしかな
越後新潟にて
海よりの月やきらきら雨
市代表の重賢
物問へやぬの井の月と答

俳諧書目

文栄堂　河内屋　七板

大阪心斎橋通北久宝寺町

芭蕉翁附合集評註　篤老編　二冊
第一世の俳句注解して見やすくした

古今句鑑　素外選　四冊

同　拾遺　四冊

俳諧十家類題集　五冊

芭蕉を角　嵐雪　麦林　素堂　言水　北枝　東山　希因　其角村
右十人の発句を集て類題集む

新十家歳句集　四冊

土朗　月居　蒼虬　色素　完来　成美　升六　李湖　乙二　樗堂
右十人の発句を集む

新五子稿　蕪村中興名人五人の発句を集て新稿とす　二冊

半化坊歳句集　二冊

俳諧歳句題巣集　升六選　五冊

歳句題林十二月抄　小本　全一冊

古人の発句を十二月ふるけ次名ありの
なるものをとり題の下に和漢のことを
引くべく挙げ俳徒の作ならんことを

花屋菴校
芭蕉袖中紙

翁一生のくいの二筆
月次ゆきゝけ打ゝの
変風を記す 全三冊

芭蕉翁七書

行脚撰一上巻 十六篇
句合 嵯峨日記 発句集
奥の細道 出会刻
小本 二冊

流行七部集

月居完来 まつ湖
面白記
著述の七部集也

四季併題櫻苗

花屋菴宗海
五百句
全 二冊

發句三傑集

嵯峨菴著
一冊

発句類葉集

五千句 本傳 著
全 五冊

花屋菴著
俳諧季寄圖會

四季 雑
全部十五冊

季寄の書にて此は俳諸
集の後に加へ物語りの
要を抜き実を季寄大全の
如きあり

繪入注解
季寄摺火打

古板と校正して
新図を出し
好人の便を次
再校二冊

花屋菴校
季寄絹節

三句懐中本
全一冊

増補花火草

立圖著
小本 一冊

俳諧詞寄濱のきさゝ

全一冊

俳諧宗祇戻

五冊

流行百家句集

廿六選 全四冊

袖中大和詞大成

小本 一冊

世に言物語によりて古風の言葉はあれども
いろはにまかせて名のみ多く注釈せず俗語を
もとゝ世のもち児母社為の古言を改て懐宝や
天地間の移りゆくを七門にあつめ諸国の方言を
集録し俗名和名を挙げ読書に引て正俗を明
奇異元俚俗を解せの和字遷御物を点綴せしむ

諸國方言物類稱呼

五冊

古人の名句と四季にいたる名古書を引く
事蹟を出所と要く注し元来流出の元も
もとゝ詳にして世事に差障る事なし

發句注解俳諧故事談

二冊

浪華書林

心齋橋通北久寶寺町
河内屋源七郎板